

1. プログラム

地球と人類の未来 ～ アジアから考える ～

～環境資源のワイズユースによる地域コミュニティの再生と持続可能な地域づくりをめざして～

会場: ホテルサンルーラル大湯: 菜の花の間

3月24日(土)

■開 会■

午前9:00-9:30

開会あいさつ

国際日本文化研究センター教授 安田喜憲
アメリカ 国立大気研究所 IHOPE チェアマン キャセイ・ヒバード
スウェーデン IGBP 副所長 ジョアオ・モライス

■セッション1 ■ 『目潟の年縞が語る地球の過去・現在・未来』

司会: キャセイ・ヒバード(アメリカ国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

書記: パウル・シンクレア(スウェーデン ウプサラ大学考古学・古代史学教室教授)

午前9:30-11:15 報告

「目潟マールの形成史」……………林信太郎(秋田大学教育文化学部教授)

「年縞堆積物による10年単位・年単位・季節単位の環境史復元」テイモ・ザーリネン(フィンランドトルク大学教授)

「目潟の年縞堆積物の分析による高精度の環境史復元」・マルクス・シュワブ(ポツダム地球学研究所研究員)

「秋田県一ノ目潟年縞堆積物の層序と環境」 篠塚良嗣(北海道大学研究員)山田和芳(学術振興会研究員)

安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)

「秋田県一ノ目潟の火山灰層序」……………奥野充(福岡大学助教授)・鳥居雅之(熊本学園大学教授)

「秋田県一ノ目潟年縞堆積物の花粉分析からみた環境変動」……………守田益宗(岡山理科大学助教授)

ミロスロウ・マコホニエンコ(ポーランドアダムミキエビッチ大学助教授)

北川淳子(国際日本文化研究センター研究員)・五反田克也(千葉商大講師)

安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)

「日本の年縞堆積物中のアルカリ性微小火山灰層の地質化学的検出」

豊田和弘(北海道大学助教授)・梅津茜(北海道大学大学院学生)・篠塚良嗣(北海道大学研究員)

リン・チュンワン(北海道大学)・北川浩之(名古屋大学助教授)・安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)

「秋田県一ノ目潟堆積物からのブナ化石の発見とその環境史における意味について」……………

那須浩郎(総合研究大学院大学上席研究員)・藤木利之(名古屋大学大学院環境科学研究科研究員)

「秋田県一ノ目潟の年縞堆積物と年輪の比較から明らかとなった気候変動とその影響」……………

米延仁志(鳴門教育大学助手)

「中国における先史時代の環境破壊の地域性」……………

ソウ・リピン(中国 北京大学地理学教室教授)・リ・イジン(中国 北京大学地理学教室)

ウエイ・ファン(中国 北京大学地理学教室)・タン・ファイ(中国 北京大学地理学教室)

「中国東北部の自然植生にたいする人間の破壊:花粉分析によるアプローチ」……………

ミロスロウ・マコホニエンコ(ポーランド アダムミキエビッチ大学古地理学・地生態学研究所助教授)

安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)

午前11:15~12:15 討 論

■あいさつ ■

午後 1:30-2:00

秋田県総務企画部長 渡部文靖
環境省総合環境政策局 環境計画課 課長 奥主喜美
北海道大学大学院地球環境科学研究科教授 甲山隆司

■セッション2 ■ 『文明と環境の脆弱性と持続性』

司会:ヘンリー・ホーギムストラ(オランダ アムステルダム大学教授)
書記:キャセイ・ヒバード(アメリカ 国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

午後 2:00-2:45 報告

「モンスーンアジアの稲作漁労文明の脆弱性と持続性」……………安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)
「最近の研究によるカンボジア・クメールの歴史」……………チェ・チュブン(カンボジア文化副大臣)
「エジプト文明の脆弱性と持続性」……………フェクリ・ハッサン(イギリス ロンドン大学教授)
「持続型文明社会の構築に向けて:ローマ文明からの教訓」ジョセフ・テインター(アメリカ アリゾナ大学教授)

午後 2:45-3:30 討論

午後 3:30-4:00 ポスターセッション

■セッション2 ■ 継続

司会:フェルノン・スカルボロウ(アメリカ シンシナティー大学教授)
書記:キャセイ・ヒバード(アメリカ国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

午後 4:00-5:00 報告

「中国における環境変動と人間の歴史」……………リウ・ジャジ(中国科学院名誉教授)
イン・シャオガン(中国科学院)・チュ・ゴキアン(中国科学院)ニ・ユンアン(中国科学院)
「南スリランカとマダガスカル文明変動と環境」……………バウル・シンクレア(スウェーデン ウプサラ大学教授)
「先史メソアメリカの文明と環境:アジア太平洋の視点から」フレッド・バルデッツ(アメリカ テキサス大学教授)
「熱帯アメリカにおける人類の居住に対する気候変動の影響」
ヘンリー・ホーギムストラ(オランダ アムステルダム大学教授)

午後 5:00-6:00 討論

3月25日(日)

■セッション3 ■ 『アジアの伝統文化の弾力性と持続性』

司会:ジョセフ・テインター(アメリカ アリゾナ大学教授)
書記:バウル・シンクレア(スウェーデン ウプサラ大学教授)

午前9:00-11:00 報告

「スバックとその持続性」……………ゲデ・ピラワン(インドネシア ウダヤナ大学副学長)
「インドネシア バリ島の信仰と水利用」……………河合徳枝(財団法人国際科学振興財団主任研究員)
「古代マヤとバリ島における持続社会システム」……………フェルノン・スカルボロウ(アメリカ シンシナティー大学教授)
「ヒンドウーにおける聖なる水」……………テルゲ・エステイガード(ノルウェー ベルゲン大学教授)
「聖なる水:ユダヤ教・キリスト教・イスラム教における役割」……………
フランチェスカ・デ・チャテル(ベルギー ジャーナリスト)
「雷神から龍神への転身」……………李均洋(中国 北京首都師範大学教授)
「アニミズムと環境保全:八郎太郎伝説を例に」……………谷口吉光(秋田県立大学准教授)

午前11:00-12:00 討論

■セッション4 ■ 『地域の伝統文化と地域資源のワイズユース:』

秋田から世界の未来を考える』

司会:熊谷嘉隆(国際教養大学地域環境研究センター長)
書記:フレッド・バルデッツ(アメリカ テキサス大学教授)

午後 1:30-2:30 報告

「地域資源の保全と持続的観光」……………ステーブ・マックール(アメリカ モンタナ大学教授)
「森林と生物多様性からみた、持続可能性のための伝統的叡智と経営体の行動」……………
真下正樹(日本経団連自然保護協議会顧問)
「紛争を回避する日本の共同体システム」……………平川 新(東北大学東北アジア研究センター長)
「子どもの福祉の視点からみた家族関係と両親の協同性—スウェーデンの福祉モデルの再検討」……………
高橋美恵子(大阪外国語大学助教授)

午後 2:30-3:30 討 論

午後 3:30-4:00 ポスターセッション

午後 4:00-5:00 報 告

「秋田の森と水」……………佐藤文一(秋田県産業経済労働部長)
「秋田の農村の持続性と弾力性:農村づくりの取り組みから考える」……………荒極豊(秋田県立大学教授)
「環境資源を活用した持続的地域コミュニティの構築」……………前中ひろみ(国際教養大学助教授)
「EIMY:日本の伝統社会に残されたエネルギー持続システムの再利用」……………
新妻弘明(東北大学環境科学研究科教授)・池上真樹(東北大学環境科学研究科)

午後 5:00-6:00 討 論

3月26日(月)

■セッション5 ■ 『技術とアジアの未来』

司会:ジョアオ・モライス(スウェーデン IGBP 副所長)
書記:ステイブ・アウレンバッハ(アメリカ 大気環境研究所研究員)

午前 9:00-11:00 報 告

「資源争奪戦とアジア太平洋地域の未来:モダニズムとアニミズムの衝突」……………
谷口正次(国連大学理事)
「日本の産業を支える金属資源の確保について」……………
白鳥寿一(東北大学環境科学研究所 DOWA エコシステム課部長)
「社会の持続的発展への日本鉄鋼業の貢献」……………篠上雄彦(新日本製鉄株式会社マネージャー)
「アジアのエネルギー需給展望と政策課題」……………十市勉(日本エネルギー経済研究所専務理事)
「ものづくり日本の国家戦略」……………宮内博美(経済産業省商務情報政策局サービス課課長補佐)

午前11:00-12:00 討 論

■セッション6 ■ 『持続型文明社会に向かって』

司会:ジョアオ・モライス(スウェーデン IGBP 副所長)
書記:キャセイ・ヒバード(アメリカ国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

午後1:30-2:00 報 告

「生命文明のパラダイム」……………大橋力(財団法人国際科学振興財団理事)

午後2:00-3:00 討 論

午後3:00-3:30 ポスターセッション

午後3:30-4:00 報 告

「IHOPE の今後の展開とインフォメーション・システム」
ステイブ・アウレンバッハ(アメリカ 大気環境研究所研究員)

午後4:00-5:00 討 論

午後5:00-5:30 総 括 ……………キャセイ・ヒバード(アメリカ国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

午後5:30-6:00 閉会挨拶 「文明と持続性」……………フェクリ・ハッサン(イギリス ロンドン大学教授)

※報告者及び日程は変更になる場合があります

国際シンポジウム in 秋田

地球と人類の未来 アジアから考える

環境資源のワイズユースによる地域コミュニティの
再生と持続可能な地域づくりをめざして

参加費無料
同時通訳有り

とき・ところ

3月24日^土～26日^月

ホテルサンルーラル大潟

秋田県南秋田郡大潟村北1-3

☎0185(45)3311

秋田県総務企画部総合政策課 企画・政策班
☎018(860)1214 ☎018(860)3873
E-mail:seisaku@pref.akita.lg.jp
U R L:http://www.pref.akita.lg.jp/

- セッション1 『目潟の年輪が語る地球の過去・現在・未来』
- セッション2 『文明と環境の脆弱性と持続性』
- セッション3 『アジアの伝統文化の弾力性と持続性』
- セッション4 『地域の伝統文化と地域資源のワイズユース：
秋田から世界の未来を考える』
- セッション5 『技術とアジアの未来』
- セッション6 『持続型文明社会を求めて』

主催：秋田県・国際日本文化研究センター安田研究室・日本学術会議・IGBP・PAGES・AIMS・IHOPE
共催：環境省・地球環境戦略研究機関 後援：経済産業省

2. 参加人数

24日：130名

25日：110名

26日：80名

3. シンポジウム当日の状況



安田喜憲 国際日本文化研究センター教授

「秋田から、皆さんと一緒に、21世紀の地球と人類の未来について考えたい。過去から現在を見て、未来を予測することが重要である。」とあいさつ



一ノ目潟の年縞調査の分析成果等を国内外の研究者が報告



秋田県立大学の谷口准教授
八郎太郎伝説がどのように環境保全に貢献したか等の研究を報告



セッション4の座長は国際教養大学の熊谷嘉隆地域環境センター長が務めた



秋田県立大学の荒樋教授
秋田県能代市常盤地区で実施した「体験型ツーリズム開発の可能性調査」の成果を発表



国際教養大学の前中助教授
阿仁地域で実施した、地域資源の聞き取り調査に基づく持続可能なコミュニティ構築モデルについて発表

4. 発表用資料（今回の調査研究に関するものを抜粋）

「アニミズムと環境保全：八郎太郎伝説を例に」（秋田県立大学准教授 谷口吉光）

**Animism and the Environmental Conservation:
The Case of Hachirotarō Legend**

アニミズムと環境保全：
八郎太郎伝説を例に




Yoshimitsu TANIGUCHI
(Akita Prefectural University, Japan)
谷口 吉光（秋田県立大学）

Outline of this paper（本報告の構成）

1. What is "Hachirotarō Legend"?
(八郎太郎伝説とは何か?)
2. What did this legend work for the environmental conservation?
(八郎太郎伝説は環境保全にどんな貢献をしたか?)

What is Hachirotarō Legend?
(八郎太郎伝説とは何か?)

- "Hachirotarō" is the name of an animistic god who has been long beloved by the people of Akita.
- He is half man and half dragon.

(八郎太郎は長い間秋田で愛されてきたアニミズム神である。姿は人間と龍半々である)



八郎太郎神（秋田県神の八郎太郎神）

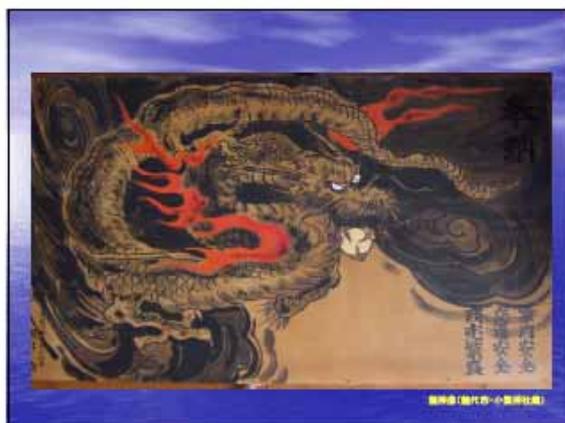
Different images of Hachirotarō
(八郎太郎の多様なイメージ)






八郎太郎神（宮田町大町3 八郎太郎神）
八郎太郎神（大森町大森町の八郎太郎神）
女川の八郎太郎神（宮田町新田町の八郎太郎神）
鶴が淵神社に祀られた八郎太郎神（湯沢町大町の八郎太郎神）

八郎太郎神（宮田町大町3 八郎太郎神）





Story (物語)

Hachirohime created Towada Lake and lived there, but one day a boze challenged Hachirohime for the governance of Towada Lake. Hachirohime was defeated and had to move away.

(八郎太郎は十和田湖を創り、そこに住んだが、ある日修行僧に挑戦されて負け、立ち退かなければならなかった)

十和田湖
青森市の町並み(八戸市・青森県)

Story (物語)

After a long journey along Yonezumi River, Hachirohime finally reached Japan Sea and created Hachirogata Lake and lived there happily.

(八郎太郎は米代川沿いに長い旅を経て、日本海に到着して八郎湖を創り、幸せに暮らした)

At Hachirogata, Hachirohime became a god esp. for fishermen. He was believed to provide the richness of fishing resources and the safe environment for fishermen. (八郎湖では八郎太郎は主として漁業の神となった)

八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)
八郎太郎神社(五所町)

Hachirogata Lake was rich in fishing resources.

川辺漁師の写真集 漁の記憶

Hachirogata was also rich in lake weeds.

川辺漁師の写真集 漁の記憶

No border between the land and the lake.

川辺伝説「写真集 湖の記憶」
文化庁博物館 国史資料館蔵

The lake was a great playground for children.

子供たちの遊び場であった
 湖は、今も子供たちの遊び場

川辺伝説「写真集 湖の記憶」

How did this Legend work for the environmental conservation?
 (八郎太郎伝説はどのように環境保全に貢献したか)

Example: Spring feast to welcome Hachirotarō
 (春の彼岸に八郎太郎の帰りを迎える祭りをした)

Example: New Year's day's feast to pray for safe fishing and a big catch
 (新年に安全と豊漁祈願の祭りをした)

Example: Fishermen's circles called "Hachiro Ko"
 (漁師仲間で作る八郎講でも安全と豊漁祈願をした)



Hachirogata Lake was reclaimed and Ogata Village was constructed in 1960s.

This hotel

To restore the natural lakeshore before the reclamation, a project was started called "Hachirotarō Project".

A study tour was made for children to help them learn the environment around the lake.

陸生植物の観察

▼ 旧湖岸

▼ 水生植物の観察

Children planted various plants to restore the lakeshore.

▼ 八朗湖岸での小学生

▲ 植え付ける様子



"Hachirotao" will be a symbol of new environmental movements in Akita.

天玉小学校の子どもたち

Animism: A "Dimension forgotten" of the environmental conservation. (アニミズムは環境保全の「忘れられた次元」である)

Apparent dimensions (目に見える次元)

Policy (政策)

Science-technology (科学技術)

Society (社会)

Dimensions forgotten (忘れられた次元)

Commons (共有地)

Animism (アニミズム)



「秋田の農村の持続性と弾力性:農村づくりの取り組みから考える」(秋田県立大学教授 荒樋豊)



日本における村落の理解 (1)

- 日本の村落
 - ①体制による支配の単位
 - ②住民の自治的単位
 - ・共有林野・生活道等の共有財産の共同利用
 - ・相互扶助規範の保全
 - ・地域文化(お祭りや年中行事)の創造
- 歴史的にみれば、
 - 室町時代 : 「惣村」(原型)
 - 江戸時代 : 「藩政村」
 - 明治期以降 : 「大字」、ところにより「小字」

日本における村落の理解 (2)

- 村落の自律性
 - ①外部からの力に対する抵抗力
 - ・例えば、年貢徴収のせめぎ合い
 - ②構成メンバーの同質性
 - ・低位の生活水準
 - ・家族単位の土地所有と家族的農業経営
 - ・定住性に基づく濃密な血縁・地縁関係
 - ③内部での制裁規範
- 日本村落は、外界からの影響を柔軟に受け止めながら、メンバー合議による地域運営を担ってきた。すなわち、「弾力性」と「持続性」を保持してきた。

今日の日本農村の問題状況

- 現在の問題状況
 - ①高度経済成長による影響
 - ・農村から都市への人口流出 → 農村社会の過疎化
 - ・農業就業から在宅での農外勤務へ → 農業の兼業化
 - ・都市域の拡大 → 周辺農村の混住化
 - ②都市的生活様式の浸透
 - ・例えば、家電品にみる世帯への急激な浸透
 - 買うためのお金の必要性が高まる
 - 従来からの自給的な地域経済が崩壊
 - ③日本農業の不振
- 農村住民の減少、高齢化などにより、農村コミュニティの「弾力性」と「持続性」は不確か！
 - 地域生活を守るため、農村活性化の取り組みが必要

農村再生プロデュース

- ◎対象地域: 秋田県能代市常盤地区
- ◎農村地域づくりの2つの柱
 - (1) 精神的活性化(地域づくり意欲の喚起)
 - ・農村の魅力発見のための子供らとのワークショップ
 - ・個人の意見表出のための地域シンポジウム
 - (2) 経済的活性化(農業の立て直し)
 - ・お米の付加価値づけ、その販売 <減農薬・天日乾燥米>
 - ・新規農産物: 花の導入 <ベツレヘムの薑>
- ◎地域づくり活動を継続させるために
 - (1) 近隣地域及び市民団体との連携
 - (2) グリーン・ツーリズムの受け皿整備
 - (3) 地域づくり会社(NPO法人)の立ち上げ



開校式 4月

親子体験教室での初めての活動

開校記念としてブルーベリーを定植

田植え体験 5月

手植えによる田植え

ワークショップでは体験での思いを絵に表した

新商品: ベツレヘムの星

結婚式場ジャック作戦(秋田市平安閣にて)

ベツレヘムの星の直売活動

ダチョウ導入式 6月

常盤地区に3羽のダチョウヒナを導入

幼稚園の園児、小学生が見学

生き物探索 8月

山頂と川瀬に分かれての生き物探索

常盤地区の自然を満喫

稲刈り体験 10月

ワラ工芸を体験

手刈り、杭かけを体験

環境資源を活用した 持続的地域コミュニティの構築 「阿仁の事例から」

国際教養大学
地域環境研究センター
前中ひろみ

国際シンポジウム
地球と人類の未来・アジアから考える
平成19年3月26日

北秋田市阿仁



秋田市

阿仁

阿仁の四季



調査目的

- 山村における地域資源のワズユース (阿仁)

研究プロセス(平成18年11月ー平成19年2月)

- 文献調査
 - 村誌、町史、郷土史、統計、自伝、学術誌、新聞など
- 資源利用形態の調査
 - 聞き取り調査
 - 阿仁三集落(打当、比立内、根子)と八森、計66人
 - 聞き取り調査データの分類、整理
- 調査データの分析
 - 継承すべきもの、知恵、技、心の検証
 - 継承・活用する上での課題・問題点
- 継承・活用のアプローチの検討

作業風景



聞き取り調査結果の項目分類

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ➤ 生業 ➤ 衣 ➤ 食 ➤ 住 ➤ 燃料 ➤ 肥料 ➤ 冠婚葬祭 ➤ 集落行事 ➤ 伝統芸能 ➤ 出稼ぎ ➤ 狩猟 | <ul style="list-style-type: none"> ➤ 道具 ➤ 薬 ➤ 水 ➤ ゴミ ➤ ものづくり ➤ 伝承・民話 ➤ 集落内相互扶助 ➤ 家族 ➤ 情報 ➤ 交通 ➤ 信仰 |
|--|---|



阿仁の集落と暮らし

1. 地域内完結型・自立的な生活資源調達
2. 地縁・血縁・共同作業を通じた相互依存・相互扶助
3. 山ノ神への畏敬の念と信仰
4. 伝統行事・芸能などの文化の共有と継承
5. 集落の一員としてアイデンティティーの自覚

森が育てた基幹産業

広葉樹、針葉樹

林業

山菜・きのこ・野草
野生動物の肉、骨、
毛皮、内臓など

狩猟採集産販売業

暮らしの変化と森への依存度の低下

- 通信交通の普及による生活圏の拡大
 - 集落外からの生活資源の流入
 - 食料品：スーパーの発達
 - 建材・道具：安価な外材の輸入や大量生産品の普及
 - 石油関連製品（燃料、洗剤、プラスチック容器、肥料など）の増加
 - 農業の機械化による兼業農家の増加と現金収入の増加
 - 共同作業の減少による人々の絆の希薄化
- 。。。森と人との関係希薄化

私たちは何を継承したいか？

- 人間が自然の一部であるという事実の再認識
- モノを大切に作る気持ち
- 消滅の危機に瀕している地域の知恵、技
- 希薄化している相互扶助の精神

ワイズユース継承における課題

- 経済・社会システムの変容
 - 便利で安いものがいくらでも入手可能
- 過疎・高齢化
 - 集団作業が困難
 - 認識の欠如
 - 担い手不足
 - 地域伝統文化が既に消滅しつつある
- 人の繋がり希薄化
 - 集団作業の必要性がない
- 基幹産業(鉱山・林業)の消滅および斜陽化
 - 過疎化

阿仁版持続可能なコミュニティ構築モデル

1. 阿仁学の構築

4. 情報発信機能強化

2. 研究拠点形成

5. 基幹産業強化

3. 後継者確保

6. エコツーリズム推進

7. 人材育成

5. ポスターセッション

名 称	内 容	備 考
男鹿市一ノ目潟「年縞調査」	男鹿市一ノ目潟の年縞調査の過程や調査結果のパネル。年縞のはぎ取り標本、年縞や火山噴出物のサンプルを展示	ワイズユース調査 『基礎調査』
環境共生型に配慮した体験型総合ツールズム開発の可能性調査	能代市常盤地区で行われた、「訪問される魅力的な農村づくりへの試み」についての調査研究をパネル展示 (秋田県立大学 荒樋豊教授)	ワイズユース調査 『受託研究』
二ツ井町における木造校舎と地域コミュニティに関する調査	調査成果の一つである、画家の高橋郁衣氏が描いた木造校舎や農村原風景の鉛筆画を展示 (秋田公立美術工芸短期大学 菅原香織先生)	ワイズユース調査 『受託研究』
アンケート調査、現状調査の報告	県北地域と男鹿地域を対象に行われた、地域環境資源に関するアンケート調査結果と水循環や地域資源等に関する現状調査の報告書を展示	ワイズユース調査 『基礎調査』
ワイズユース調査の検討モデル	ワイズユース調査において検討した「環境資源のワイズユースによる地域モデル」のパネルを展示	ワイズユース調査 成果
環境リサイクルや環境美化事業の紹介	県内で取り組まれている環境リサイクル活動や環境美化事業を紹介するパネルやリサイクル製品のサンプル等を展示	秋田県環境あきた創造課
秋田の農山村の伝統的な文化と生活様式の紹介	もちつき、わらじ、くわ、干し餅など、秋田の伝統的な農山村における生活文化を再現した「ちょっと、いっぷく」コーナーや、実物の稲わらやお供え物を展示した「雪中田植え」コーナーを開設。「ちょっといっぷく」コーナーでは、短冊を用いた書道講座も行われた	水土里ネット秋田
ふるさと水と土保全活動の紹介	県内各地における、棚田を地域資源としての活用している事例をパネル展示とスライドショーの上映により紹介	秋田県農山村振興課
秋田の食文化の紹介	「きりたんぼ」や「八タ八タ」等、秋田の伝統的な食文化をパネル展示で紹介	秋田県食の国あきた推進チーム



男鹿市一ノ目潟「年縞調査」



環境共生型に配慮した体験型総合ツーリズム
開発の可能性調査(秋田県立大学荒樋豊研究室)
アンケート調査・現状調査の報告、ワズユース調査の検討モデル



二ツ井町における木造校舎と地域コミュニティに関する調査
(秋田公立美術工芸短期大学菅原香織先生)

画家の高橋郁衣氏が描いた木造校舎や農村原風景の鉛筆画の展示



環境リサイクルや環境美化事業の紹介の紹介コーナー

(秋田県環境あきた創造課)



ふるさと水と土保全活動の紹介(秋田県農山村振興課) 秋田の食文化の紹介(秋田県食の国あきた推進チーム)



秋田の農山村の伝統的な文化と生活様式の紹介(水土里ネット秋田)

秋田の伝統的な農山村における生活文化を再現したコーナー



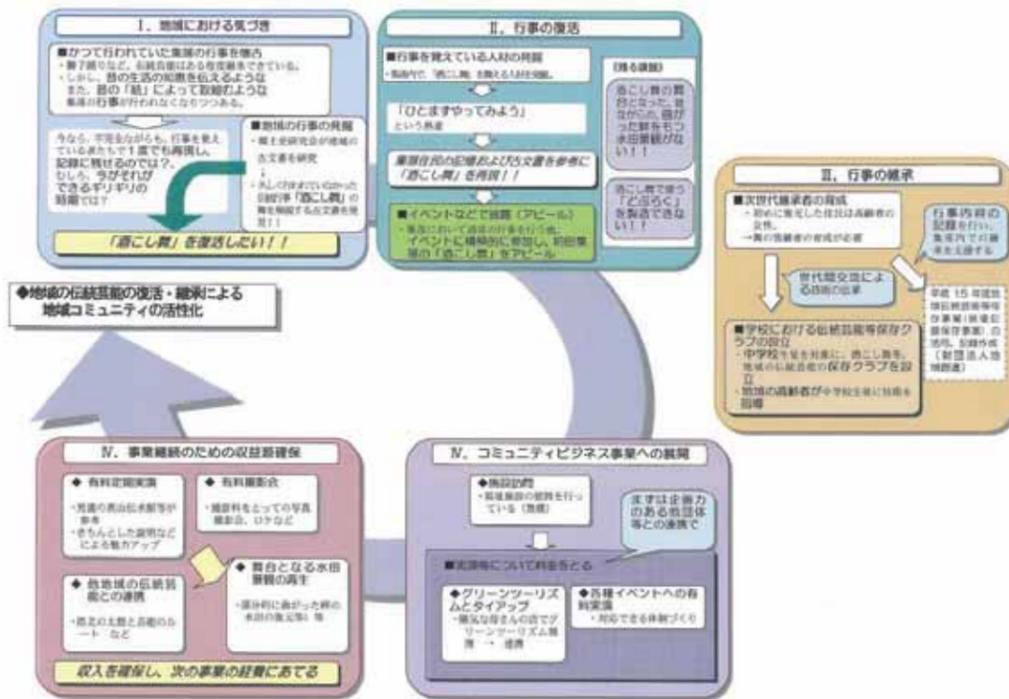
「雪中田植え」の紹介コーナー

秋田から発信するウィズユースモデル (例)

粕田伝統芸能モデル

～「毎月が祭り」の村の地域コミュニティの活性化～

粕田集落には、現在でもほとんど毎月祭りがある。祭りは人と人の交流の場であり、また人と自然の関わりかたを今に伝える。祭りや伝統芸能を通じて、人と自然の心のつながりの再構築と、持続していくための経済的自立性確保（コミュニティビジネス化）をめざす。



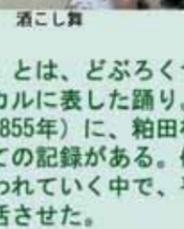
粕田人形様（無病息災を願う祭り）

伝統芸能をきっかけとした交流



獅子踊り

「陽気な母さん」との交流



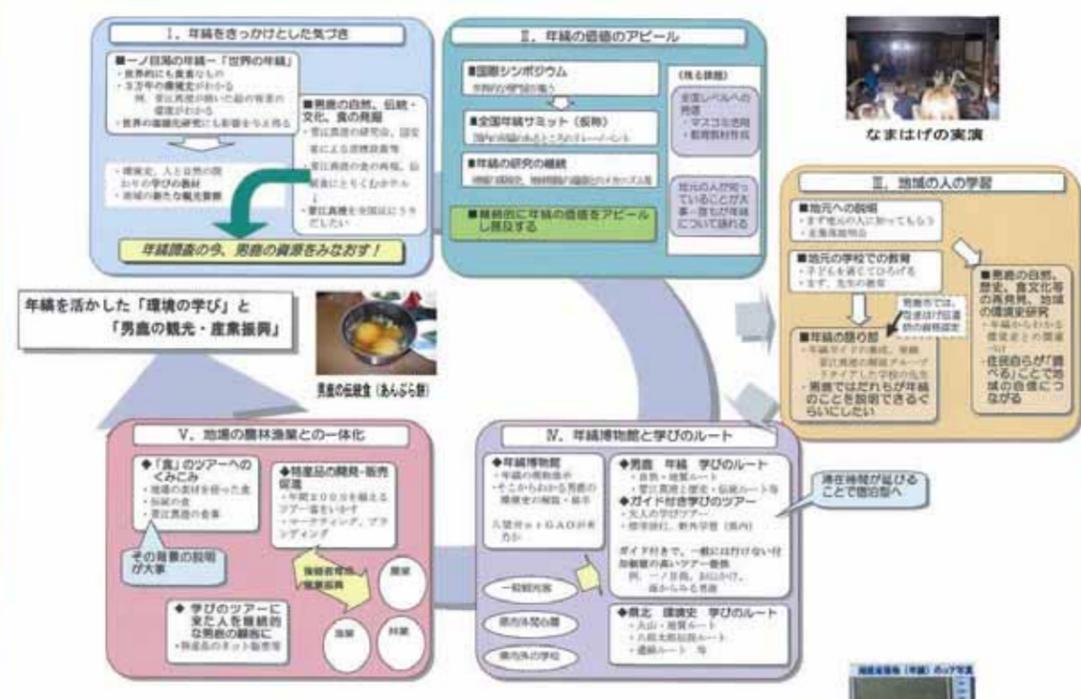
酒こし舞

「酒こし舞」とは、どぶろくづくりをコミカルに表した踊り。江戸時代（1855年）に、粕田村の名物としての記録がある。伝統芸能が失われていく中で、平成8年に復活させた。

男鹿モデル

～年縞を起爆剤とした「学び」と「産業振興」～

一ノ目潟の「年縞」は、3万年の環境変化を一年一年の縞模様の中に記録している世界的に貴重なもの。年縞の研究は、男鹿の自然や歴史資源に新たな価値を与えると同時に、地球規模の温暖化研究ともつながる。男鹿の地域産業振興と、国民的な環境の学びと意識変革への活用をめざす。



一ノ目潟（真澄）男鹿半島（ゲート）より



一ノ目潟（現在）



年縞写真

6. エクスカーション

エクスカーション日程表(3月27日)		
時刻	滞在時間 (移動時間)	内容
9:00		ホテルサンルーラル大潟 発
	(40分)	
9:40 ~ 10:10	30分	八望台(目潟周辺の自然環境を視察)
	(10分)	
10:30 ~ 11:50	60分	男鹿水族館 GAO
	(20分)	
12:00 ~ 13:30	90分	きららか(昼食・休憩・自然散策)
	(30分)	
14:00 ~ 15:10	70分	なまはげ館・男鹿真山伝承館
	(20分)	
15:30 ~ 16:30	60分	寒風山(大潟村、男鹿周辺を視察)
	(30分)	
17:00		ホテルサンルーラル大潟 着



八望台展望台でパネルを用い目潟の周辺環境について安田教授と県の担当者が説明



伝承館でのなまはげ習俗の体験

7. 終了時の記者発表要旨

記者発表出席者 安田喜憲(国際日本文化研究センター教授)

キャセイ・ヒバード(アメリカ国立大気研究所 IHOPE チェアマン)

ジョアオ・モライス(スウェーデン IGBP 副所長)

フェクリ・ハッサン(イギリスロンドン大学考古学研究所教授)

フェルノン・スカルボロウ(アメリカシンシナティ大学教授)

フレッド・バルデッツ(アメリカテキサス大学教授)

安田教授：目潟の「年縞調査」で、過去3万年の歴史が連続的に確認された。世界の研究者は、目潟の年縞は素晴らしいと驚いている。今後、国内外の研究者で徹底的に研究したい。

十和田湖と目潟の間に『エコ・コリドール』をつくるのが、IHOPE、IGBPから提唱された。国外の研究者は、今回のシンポジウムを通じて、八郎太郎やなまはげの伝説、阿仁の農山村の生活等に強い関心を持った。秋田の人々が普段何ともないと思っていることに驚きと感動を覚え、それが、21世紀の人類を救う可能性があることを口癖に語っていた。

IGBPには約12,000人、AIMESは約6,000人の世界のトップの研究者が参加している。世

界トップレベルの研究者が、今回のシンポジウムでは、研究者だけでなく、行政、企業がプレゼンに参加し、「21世紀の持続的な地球と人類の未来が築けるか」を積極的に討論していることに感銘を受けていた。

キャセイ・ヒバート：IHOPEは考古生態学地質学環境学等、環境や歴史に関する世界の研究者で成り立っている。今回初めて秋田で開催したが、世界的にも先駆的なワークショップとなり他の地域で行うきっかけとなった。次回は秋田にIHOPEの若手の研究者を集めて行いたい。

ジョアオ・モライス：IGBPでは、世界に5,000~6,000人の研究者が参加し、地球の気候変動などに関するプロジェクトを行っている。秋田では、老人達も社会の一員として貢献し、全ての年代の人たちがそれぞれの役割を果たしていることに感銘を受けた。IGBPの同僚に秋田のすばらしさを伝えたい。秋田ではサステナブルな社会が形成されている。秋田をモデルに持続可能な社会をつくる「インターナショナル秋田モデル」を提案したい。

安田：今回のシンポジウムのファーストステップは『年縞』であったが、セカンドステップ、サードステップは、秋田の地域コミュニティのあり方、伝統的な資源、そういったものから、秋田をどう再生するか、これが大きな目的であった。伝統的な文化や、持続的なライフスタイルに基づいて、21世紀の世界にどう貢献するかを、世界のトップレベルの人々が気づいたシンポジウムであった。

フェクリ・ハッサン：地域的なプロジェクトと世界的なプロジェクトが協力して行われた歴史的な会議であったと思う。様々な分野の人々が融合し、産・官・学、NGO等の協力が重要であることに気づいた。世界の問題を解決するためには、「自然から学ぶ」「伝統から学ぶ」「お互いから学ぶ」の3つ要素が大切である。秋田は、自然と共存し、伝統を維持している。今回の会議は、様々な国からの参加者が出会う、プラットフォーム、土台となった。

安田：(今日ここには来ていないが、ローマ文明を研究しているアメリカ・アリゾナ大学の)ティンター教授は、目潟周辺の水田を見て、田園風景や洗練された灌漑システムによる水の循環に感動していた。我々には、まったく当たり前なことだが、「自然から学ぶ」「伝統文化から学ぶ」「人と人との関係、コミュニティから学ぶ」ことの重要性を彼らが学んだ。

スカルボロウ：秋田そのものが日本の宝。秋田には地域から学ぶこと、人々と環境から学ぶことがたくさんある。なまはげ館では「民族的な信念の重要さ」を感じた。アメリカ、ニューメキシコ州にもなまはげに似た「メロス」という行事がある。子供たちはメロスを恐れ、よりよい人間になろうとする。教育の重要さ、家族の重要さを学ぶという意味で、なまはげと非常に類似する。

バルデツ：いろいろな分野の人間が集まるのが重要。自分の専門のマヤ文明もそうであるが、文明はある時までは栄えるが、とても壊れやすいもの。そして文明の進化はいかに自然と関係していたかということが重要。今後、しっかりとリサーチを続けていきたい。過去を見ること無しには、未来を見ることはできない。

安田：秋田は世界から注目された。すばらしい文化を持っている。年縞だけではない。なまはげをはじめとする「伝統文化」、阿仁をはじめとする「ライフスタイル」。『日常』そのものがすばらしい。今回のシンポジウムと通し、ローカルがグローバルに直結したことが一番重要である。

キャセイ・ヒバート：十和田と目潟の間を、エコ・コリドールとし、特に、IHOPEの若い研究者達の教育の場としたい。エコ・コリドールがIHOPEの世界的な将来のモデルになってほしいと思う。

フェクリ・ハッサン：シリコンバレーが世界の情報化産業の最先端となったように、エコ・コリドールが、21世紀の国際的な世界の文化の中心になる。

安田：十和田~目潟エコ・コリドールが、世界で誰でも知っているような、21世紀の自然と人類が共存する世界のモデルとなる。